

## 新しいぶどう酒は新しい革袋に

レビ記23:27

マルコによる福音書2:18~22

先週は牧師就任式が無事行われ、ホッとしています。これからまた気持ちを新たにしてお仕事をしていきたいと思っています。ここで「新たに」と言いましたのは実際の内容として新しくという意味です。では今までそうではなかったかと言うとそうではなく、ただこの就任式を機会にこの半年間を振り返ってみて、反省して改めて歩み出したいと思っています。

今日の新約の聖書箇所では、まずヨハネの弟子たちとファリサイ派の人たちが断食しているところから始まります。断食というのは、食べることを拒むので、いわば一時生きるということに仮に中断するみたいな意味もあるでしょう。そこにおいては今日のようにダイエット目的ではなく、おのれの罪を悔い、また悲しむということがなされるのです。律法によれば年に一度の贖罪日には断食しなければならなかったのですが、またそれ以外にも彼らは週二回ほど 日を決めて断食していたようです。洗礼者ヨハネは、粗布を纏い腰に帯を締めイナゴと野蜜とを食して粗で声を上げていた、というように禁欲的な生活をしていました。ですからこのようにしていたのは納得できます。またファリサイ派の人たちは自分たちを他の人から区別して（ファリサイという名は周りから付けられたもの：例えばピューリタン（純粋な人たち）もそうですが）、律法に対して極めて忠実に守っていたグループでしたので、これも理解できます。ただ断食するという事は、そもそも何かその原因や理由があって、それについて行うというというのが本来的ではないでしょうか。何の理由もなく決められた日に行うというのは、やはり形式的になりやすいものであります。特にそのすべきに、喜ばしい日楽しい日ならば、断食するには不向きでありましょう。ファリサイ派やヨハネの弟子たちが、規則通りに断食しているのに対して、イエス様の弟子たちがそれをしていないのを人々は見て、なぜかとイエス様に問いますが、その折にイエス様は婚礼のたとえをされます。婚礼というのは喜ばしい楽しい時です。（ドイツ語では **Hochzeit** といい、最高の時、クライマックスというのが語義）友人の婚礼の席で断食してつらそうな顔をしているのは、その場に不似合であり、また失礼でもあります。（よっぽどその花嫁が好きであって、その姿を見ると断腸の思いがするほどつらく食べ物も喉を通らない、というなら話は別ですが、そのような人なら婚礼の場に来ないでしょう）イエス様がここで言われる花婿とはイエス様ご自身のことであり、花婿の友人（新郎新婦の寝室にまで入っていくような関係）というのは彼の弟子たちのことです。イエス様と共にいるというのは常に花婿という婚礼の喜びの場にいるようなものでしょう。婚礼の場に招かれて祝い楽しんでいる幸せな時間なのです。ですからイエス様といるときはその喜びで断食などする必要がない、と言われるのです。「花婿がいる限り、断食はできない」というようにすべきではないでしょう。しかし、弟子たちはいつまでもイエス様と一緒に生活していくことはできません。この世でお別れする時が来るのです。イエス様はすでにこの段階でご自身との別れが来ることを言っておられます。「出会い別れの始まり」と言いますが、そのような一般的なことよりも、別れるのが「奪い取られる時」というように、すでにここでご自身の受難を示唆されているのです。イエス様と引き離されてしまったなら、それは大きな悲しみが弟子たちを襲うことでしょう。そのような折には断食をしてもかまわない、或いは悲しみを表すのにふさわしいのです。イエス様が十字架に掛けられた日には、彼らは食べ物も喉を通らなかったかもしれませぬ。

この後イエス様は続けて、布とぶどう酒のたとえを持ち出して、いずれも新しいものを古い物に当ててはならないということを説明されます。おりたての質の新しい布、まださらしていない布を古い生地へ継ぎ当てたなら、それに水を通すと、新しい部分は収縮して古い生地を引っ張り、その古い部分は破れてしまいます。また新しいぶどう酒（時期的に早い物、発酵途中のもの）については、ぶどう液が発酵によりその糖分からアルコールができますが、その際に同じ比率で炭酸ガスが副生成物として発生します。そのガスがぶどう酒を入れてある革袋を圧迫するのです。そこでもしその革袋が古い素材の物ならば、発酵ガスの押し広げる力に負けて革袋が破けてしまうでしょう。ですから「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」と主は言われたのです。ここで少し

細かいことですが、日本語ですと「新しいぶどう酒」と「新しい革袋」の「新しい」は同じ言葉ですが、元の言葉ではこの二つは違って示すことも少し違ってきます。つまりぶどう酒のほうの「新しい」は時間的にまだ早いというものであり、革袋の「新しい」はその素材、質が新しいということを意味しているのです。因みに私は大阪では教会の車に乗っていましたので、この海老名に赴任してからは車がなく、坂があったので不便を感じて車を買いました。しかし「新しく買った車は新しくなかった」のです。つまり中古車を買ったということですが、この表現と同じです。

イエス様は当時起こったばかりの新しいユダヤ教の分派というように見られていました。新しく起こったばかりですから、発酵中おぶどう酒のように元気に炭酸ガスをバンバン放出して活気がありました。ですからそのようなものは律法遵守にこだわり続けている古い体制のシステムには合わないのです。それに無理やり合わせようとしたら破けてしまうのです。そうすると古い革袋である旧体制も壊れるし、新しいぶどう酒であるイエス様たちの活動も台無しになってしまうのです。だからこそどちらも壊さないために、新しいぶどう酒は新しい革袋に入れまた新しい布切れは古い物に当てず、新しいものに継接ぎするのです。しかしここでイエス様は、古い物は絶対悪いとも言われてはいません。古い布には古い素材の布を当てればよいのだし古い革袋には発酵し終わって時間の経ったガスが出ないぶどう酒を入れればよいのです。ヨハネの禁欲主義やファリサイ派の律法厳格主義に対してはそれぞれの道を歩んで活動すればよい。イエス様の教えに従う者について彼らとは別であるので、また違う道を歩むのです。それぞれにふさわしい道、方法があるのです。

イエス様は決して律法をないがしろにしたりはされませんでした。古くからの教えを守っておられましたが、しかしそれと同時に律法に対しては自由でした。律法、法律と言いますと何かを規制したりして拘束され不自由になるもの、と思われがちですがそうではありません。律法によって人が正しく生きられるものとなりそれによって人があるべき道を歩めるようになる恵みなのです。逆説的ですが、結果的には律法が不自由ではなく真の自由へと導きものであるともいえるのです。人が自分の思いで好き勝手に生きるとはかえって不自由を味わうことになるものです。しかし本来的には恩寵である律法なのですが、ややもするとその行動規制にばかり神経が集中して、形骸化しやすいものなのです。イエス様はそのような点を既に見抜いておられたのです。ですから律法の本質は見失わずに、それに対しては尊重しつつも自由であったのです。そのような点でファリサイ派とは折り合わずに、彼らからは敵対視されます。

新しく活動し始めたイエス様たちは、婚礼の場のように喜びに満ちています。若いエネルギーに溢れて、弾けんばかりです。そのようなエネルギー、喜びの力は、暗い断食のつらさを凌駕します。

本日、この後礼拝において、コロナ禍ではありますが聖餐式を行います。弟子たちがその花婿であるイエス様と共に食卓を囲んだ恵みを思い起しつつ与りたいと思います。